

令和 8（2026）年度関西医科大学大学院看護学研究科

博士前期課程

入学試験問題 夏期

専門科目（慢性疾患看護学）

問題 1 以下の慢性疾患をもつ事例への看護について、要点を述べなさい。

- 1) A さん、25 歳女性。会社の健診部門より再三の促しがあり、受診することになった。
病院で行った血液検査で血小板減少、肝機能障害、炎症所見があり、膠原病の疑いのため入院が必要であると言われた。入院後の検査で、関節炎、血球減少、低補体値、抗核抗体陽性を認め、全身性エリテマトーデス（SLE）と診断。ステロイド内服治療が開始された。
- 2) B さん、38 歳男性。仕事は製造業の機械設計を担当している。両親と妹が別の県にいて、家族仲は問題ないが、仕事の都合で独居にて生活している。35 歳のときに潰瘍性大腸炎（全大腸炎型、重症）と診断され加療していたが、仕事との兼ね合いから症状軽快したタイミングで治療中断していた。6 ヶ月前から発熱、下痢、粘血便、腹痛といった症状が悪化し、食事摂取が困難となったため全身状態が不良となり入院加療となった。
- 3) C さん、63 歳男性。妻と同居、子どもは 3 人（長男 38 歳、次男 36 歳、長女 28 歳）で 3 人とも近郊別市に住んでいる。ADL 自立、営業職、60 歳で退職後、もとの職場の嘱託職員として働いている。在職中、会社の検診で肝機能低下を指摘され医療機関を受診。C 型肝炎・肝硬変を指摘された。輸血歴はなく感染経路は不明である。近医にてグリチルリチン製剤（強力ネオミノファーゲン）の点滴治療を受けている。

問題 2 以下の用語を用いた慢性疾患看護について、説明しなさい。

- 1) 自己効力理論
- 2) エンド・オブ・ライフケア

令和 8 年度（2026） 関西医科大学大学院看護学研究科
博士前期課程 入学試験問題 夏期 専門科目（慢性疾患看護学）
出題の意図および解答例

問題 1

1)

【出題の意図】

全身性エリテマトーデス（SLE）の臨床所見と検査所見、青年期女性のライフイベント、治療法であるステロイドの副作用をふまえた看護の知識を評価する。

【解答例】

全身性エリテマトーデスは免疫異常が病気の成り立ちに重要な役割を果たす原因不明の慢性疾患であり、発熱、全身倦怠感などの炎症症状、関節、皮膚、肝臓、肺、中枢神経などに様々な症状が認められる。Aさんは青年期女性であることから、蝶形紅斑や脱毛などの外見の変化と妊娠・出産などのライフイベントをふまえ、感染症、骨粗しょう症、糖尿病、脂質代謝異常等の副作用を最小限にしながらできるだけステロイドの使用量を減らせるような看護が望まれる。

2)

【出題の意図】

潰瘍性大腸炎の臨床所見と検査所見、薬物療法（5-ASA 製剤、ステロイド、免疫調節薬、生物学的製剤、JAK 阻害薬）による寛解導入と寛解維持、ならびに副作用と就労のバランスを考慮した看護の知識を評価する。

【解答例】

潰瘍性大腸炎は、びらんや潰瘍を形成する原因不明のびまん性非特異性炎症で、粘血便、下痢、発熱、腹痛などの症状のほか、食欲不振、体重減少、易疲労感がみとめられる。診断は X 線、内視鏡、生検組織所見などから総合的になされ、薬物療法（5-ASA 製剤、ステロイド、免疫調節薬、生物学的製剤、JAK 阻害薬）による寛解導入と寛解維持を中心とし、再燃と寛解を繰り返す。Bさんは壮年期にあり独居で仕事していることから、活動期であっても自己判断により薬物療法を中止しないように治療継続の必要性和副作用について説明し、就労とのバランスを図れるような看護が望まれる。

3)

【出題の意図】

肝硬変の臨床所見と検査所見、慢性肝疾患の肝機能異常改善薬、食事による栄養管理と腹

水や食道静脈瘤などの合併症への対処の知識に基づく、健やかな老年期へと移行できる向老期を考慮した看護の知識を評価する。

【解答例】

肝硬変は、肝機能が保たれ症状がほとんどない「代償期」と、機能が限界を迎え重い症状や合併症が出る「非代償期」に分かれる。病期が進行した非代償性肝硬変になると、黄疸、腹水、むくみ、食道静脈瘤、意識障害（肝性脳症）などが現れ、血液検査ではアルブミンや血小板の低下、プロトロンビン時間の延長などが特徴である。Cさんが家族の支援を得ながら、健やかな老年期へと移行できるよう、食道静脈瘤や肝性脳症といった合併症の早期発見を中心とした看護が望まれる。

問題 2

1)

【出題の意図】

慢性疾患看護に主要な理論である自己効力理論についての知識を評価する。

【解答例】

自己効力理論は、自分に必要な行動がうまくできるという予測（効力期待）とその行動を起こした結果、どのような成果や報酬が得られるかという予測（結果期待）という2つの期待からなる。自己効力感を高める4つの要因には、自分で実際に課題を達成した遂行行動（成功体験）、他人の成功を見て「自分にもできそう」と思うこと（代理的体験）、他人から「あなたならできる」と励まされたり認められたりすること（言語的説得）、リラックスしている、不安やストレスが少ない状態（生理的・情動的状态）がある。慢性疾患看護では、自己効力理論を用いて患者の自己効力感を高め、慢性疾患のある患者が自身の病気と向き合い、食事療法や服薬などの療養行動を継続できるような支援が求められる。

2)

【出題の意図】

慢性疾患看護におけるエンド・オブ・ライフケアについての知識を評価する。

【解答例】

慢性疾患のある人のエンド・オブ・ライフケアは、経過の予測が困難であり、長期的な療養支援が必要とされる。将来の治療やケアについて、患者・家族・医療従事者が事前に話し合い、意思決定を継続的に支援するアドバンス・ケア・プランニング（ACP）も重要となる。慢性疾患看護では、呼吸困難、倦怠感、疼痛などの身体的苦痛症状の緩和だけでなく、精神的・社会的・スピリチュアルな苦痛（全人的苦痛）を包括的に和らげ、機能低下が進む中で

も患者が大切にしている役割や価値観を尊重し、日々の生活調整、地域連携、家族支援が求められる。